

JAPAN NOW

観光情報協会

Non-Profit Organization JAPAN NOW TOURISM INFORMATION ASSOCIATION

東京都知事が認証した「都市・環境・観光NPO」が発信する隔月刊情報紙

第35号 発行日2006年1月28日

巻頭言

10地点結ぶ「情報網」開設へ

今年は東北・四国・中国支部を
新設し全国展開 目指す

JAPAN NOW観光情報協会（松尾道彦理事長）は、発足してから今年4月で5周年を迎える。

今年の活動計画案として東北（仙台）・四国（高松）・中国（広島）支部を開設して全国展開を進める。要望の多い「支部会則」も明文化する。昨年11月には7番目の支部として北海道支部が札幌市に設立され、国内の主要経済圏として東北・四国・中国地区が未開設となっている。

観光立国に取り組むJN協会は今後、東京の本部と全国10地点の支部を結んだ「JAPAN NOW都市・観光・環境情報網」（仮称）をつくり国、地方自治体、民間企業と連携して新規事業を展開する計画である。これは政府と自治体が進める「税財政改革」（三位一体の改革）に伴う地方自治体の権限強化、将来の「道州制」導入や、すでに始まっている経済ブロック圏単位での行政・企業による業際的な大観光連盟の発足などに備えるためだ。



岐阜駅前にも2007年完成する160メートルの「岐阜シティ・タワー43」。分譲プラスお年寄り向けの賃貸で、駅前、中心街に賑わいを取り戻す狙い。（6P参照）

Contents

- 1 ——— 岐阜タワー、10地点結ぶ「情報網」開設へ
- 2 ——— JN協会2005年を振り返って
- 3 ——— JN協会2005年を振り返って
- 4 ——— 「霞が関情報」(域内生産縮小へ)
- 5 ——— 「霞が関」(地方空港時代幕開け)
- 6 ——— 観光人国記(岐阜市長、十八楼女将)
- 7 ——— 立教支部(中国留学生との対話など)
- 8 ——— 新春ご挨拶(松尾、長尾、水野各氏)
- 9 ——— 同(江戸城再建一小竹、橋元、岩田各氏)
- 10 ——— 同(丹羽顧問、橋爪、岡村各氏)
- 11 ——— 同(須田、分家、坂本各氏)
- 12 ——— 会員企業一荒井建設。JN協会の経理
- 13 ——— スキーその2。COLUMN一名パイロットの話
- 14 ——— 美味しい話、道の駅
- 15 ——— NPOから提案(観光基本法)、あめりか通信
- 16 ——— 気象—22世紀の雪国、会員名簿

自治体との情報交流や

東京での首長サミットも

「JN協会都市・観光・環境情報網」を活用した新規事業としては、三位一体の改革で権限が強化される地方自治体との提携、団体会員への勧誘、都市再生や観光振興に力を入れている市町村の東京でのイベント支援、国際交流、主な全国首長による都市・観光・環境サミットなどが考えられる。自治体との情報交流では、とりあえず自治体のホームページから街づくりや観光・環境関係の政策、行事などを情報紙やホームページで紹介する。国や企業との提携も検討する。

また中部・北陸支部の合同イベントは、今年2月10日からイタリアのトリノで開く冬季五輪大会のあと同市市長を日本に招き、日伊国際交流フォーラムを計画している。

(事務局長 白澤照雄)

2005年の活動を振り返って

支部開設、講演会、見学会、研究会など多彩な行事展開

2001年4月にNPO法人の認証を東京都から受けた「JAPAN NOW観光情報協会」は、発足4年目の2005年には新たに神戸、北海道に支部を開設し、合計7支部となった。支部設置を記念した講演会、シンポジウムなどには、関係者多数が参加し、観光立国、地域振興に向けての各地の意欲を示した。

以下、JN協会2005年の動きを、項目別、時系列的に振り返り、2006年の更なる発展を期する。

新たにJN協会の2支部を開設

神戸支部 2005年3月開設。支部長に、岩田弘三・神戸商工会議所副会頭（株）ロック・フィールド社長）が就任。参加者は約200人。来賓に矢田神戸市長ら。

講演会は「近畿圏に幕開く『神戸新時代』への挑戦！」をテーマに、国土交通省の茨木康男・大阪航空局長、神戸市みなと総局の山本朋廣参与、同市企画調整局の神田勉参与が、2006年2月16日に開港する神戸空港が地域経済、観光振興に持つ意義などについて講演した。

支部開設総会に先立ち、松尾理事長以下約20名が、開設準備進む神戸空港を見学した。

なお、JN情報紙3月号では「観光人国記」に矢田神戸市長のご登場を願った。

北海道支部 2005年11月開設。支部長には、坂本眞一・JR北海道会長が就任。参加者は約310人。来賓に、高橋はるみ北海道知事ら。武部勤自民党幹事長から長文のメッセージが寄せられた。

講演会は、北海道観光連盟との共催で行った。

「21世紀は大北海道圏の時代（観光フォーラム in札幌）」を掲げ、福川伸次・電通顧問（元通産事務次官）、照明デザイナーの石井幹子さん、国土交通省の柴田耕介・総合観光政策審議官、北海道新幹線建設局長の菊池一成氏が講演。知床半島の世界自然遺産登録、北海道新幹線の札幌延伸への見通しが立つ中で、観光振興を北海道経済復権の先兵に据えようとする地元の意欲を示すかのように、会場は超満員となった。

支部開設総会のあと、岡村副理事長、杉事務局次長らが、上野動物園を上回る動員で話題を呼ぶ旭山動物園（旭川市）を回り、JN情報紙に視察記を掲載した。

JN紙11月号の「観光人国記」には、高橋北海道知事が支部設立総会で行った挨拶を掲載した。



講演会活動も活発に

名古屋 2005年1月25日。名古屋市で「21世紀は名古屋圏の時代」の統一テーマの下、福川伸次・電通顧問が「名古屋圏の活力、魅力、創力」について語り、続いて奥野信宏・中京大学大学院教授、須田寛・JR東海相談役、安原敬裕・国土交通省中部運輸局長、水尾衣里・名城大学助教授がパネルディスカッションを行った。

参加者は210人。

東京（JN協会定時会員総会のあと）2005年5月24日。約150人参加。

講演は、サッカーJリーグの鈴木昌チェアマンが「サッカーと観光立国」との題で、サッカーが地元にも及ぼす観光効果を力説した。

福岡 2005年9月21日。

「大九州圏観光フォーラム2005」のテーマで、約200人が参加。九州観光推進機構との共催。

渡辺修・JETRO理事長が「日本の九州からアジアの九州へ」と題して基調講演。石原進・JR九州社長、北川隆・鉄道運輸機構九州新幹線建設局長が九州新幹線の進み具合と効果について話し、末吉興一・北九州市長が2006年3月に開港する「新北九州空港」にかかる期待を語り、川瀬博・九州大学大学院教授が九州と地震に関して安全性など講演した。



渡辺修氏

神戸 前述の通り。

札幌 前述の通り。

見学会 — リニアカー見学は懸案に

2005年3月17日「建設が進む神戸空港」前述)

2005年7月27日「開業前のつくばエクスプレス試乗会」。松尾理事長ら11人参加。

2005年12月17日 つくば太陽光発電施設、東京電力那珂石炭専焼火力発電所、福島第一原発を見学（白澤、加納）。

山梨県都留市にあるJR東海の「リニアモーターカー実験線」の3度目の試乗会も予定していたが、愛知万博への出展と重なり、実現できなかった。2006年には、ぜひとも実施するので、ご期待下さい。



石井幹子さん

研究会はほぼ毎月開く

「観光立国セミナー」をテーマにした研究会は、ほぼ毎月開かれた。以下は、その概要。

(2004年)

- 第1回 9月14日「我が国のインバウンド」
JN協会会長(当時) 顧問 丹羽 晟氏
- 第2回 10月12日「旅への想い入れ」
JN協会理事長 松尾道彦氏
- 第3回 11月9日「観光あれこれ」
JN協会副理事長 日本貨物鉄道特別顧問 橋元雅司氏
- 第4回 12月14日「観光基本法の分析と課題」
JN協会理事 日本観光協会理事長(当時) 寺前秀一氏

(2005年)

- 第5回 2月15日「草津町の観光まちづくりについて」
群馬県草津町長 中澤 敬氏
- 第6回 3月10日「NPOと観光振興」
元国際観光振興会理事 澤田利彦氏
- 第7回 4月12日「ひとつのインバウンド業者から見た日本のインバウンド事情」
GRAND CIRCLE CO. 日本代表(当時) 北村 嵩氏
- 第8回 6月15日「スカンジナビア政府観光局の日本とアジアの観光マーケティングについて」
スカンジナビア政府観光局 日本代表 ソーレン・レアスコウ氏



- 第9回 9月13日「日本のエコツーリズムとNPO日本エコツーリズム協会の活動」
前ニュージーランド政府観光局 局長 小林天心氏
 - 第10回 10月26日「貧困克服のためのツーリズム」
立教大学非常勤講師 高寺奎一郎氏
- (2006年)
- 第11回 1月12日「ビジット・ジャパン・キャンペーンの展開」
国際観光振興機構理事 新井伎一氏
(この研究会は、2006年も続く)

JN情報紙は8回発行

隔月版が基本だが、2005年から通常総会、支部設立総会などの際、JN協会発足以来の活動状況をお知らせする臨時号を発行することにした。そして総会模様や講演の内容は直後に内容を収録して発行した。この結果、2005年の発行回数は8回となった。

このほか、新しく最終面に「気象と天気の話」を、松尾理事長が会長を務める『日本気象協会』の寄稿で連載を始めた。

団体会員としてJN協会活動を支援していただいている会員企業の紹介も、始めた。2006年も継続する予定。

10回にわたって連載した「世界遺産の旅」は、寄稿者の金内忠相さんが亡くなられたため、2005年新年号の「スペインの旅」が遺稿となった。改めてご冥福を祈る。

(情報紙のバックナンバーを読む場合は、ホームページ「http://www.jaoannow.org」を、ご覧下さい。



情報紙9月号(九州特集)



同11月号(北海道特集)

「トピックス」

名誉顧問に松山善三氏

2005年には長年の間会長を引き受けてくださっていた今村昌平(映画監督)が退かれ、これも映画監督の松山善三氏が名誉顧問としてJN協会の活動に参加されることとなった。

射水市長に分家理事 7月「海フェスタ」も

富山県新湊市長でJN協会発足時から理事を務めている分家静男氏が、昨年12月、合併に伴って富山県第3の市となった射水(いみず)市長に当選した。

7月には、同市が中心開催地となる「第4回海フェスタ」が開かれ、一昨年の台風で破損した帆船『海王丸』が修復なった姿でフェスタに彩りを添える。

2001年4月発足したJN協会は、今年で満5歳になります。会員の皆様のご支援で順調に事業を展開しており、役員一同感謝申し上げます。5月の総会号では、5年間の歩みをご紹介します予定です。

東京 震が関発の最新情報 国土交通省・総務省・財務省

35都市圏を除き域内総生産が縮小 東京圏以外の人口はすべての都市で減少へ 経産省が2030年の地域経済の動向を予測

「東京圏以外の人口はすべての都市で減少し、大都市など35都市圏を除き域内総生産額（G R P）も減少する」とする地方経済社会にとって極めて深刻な長期予測が明らかになった。経済産業省の「地域経済研究会」（座長：大西隆・東京大学先端科学技術研究センター教授）は昨年12月、人口減少下における2030年の地域経済を分析、展望した結果を発表した。これは今後の人口減少や少子高齢化が進む中で中長期的に地域経済がどのように変化するか、を具体的に展望したもので、政府機関によるこの種の地域経済予測は初めて。

この調査は、全国の通勤圏などから269都市圏に分けて技術革新などで生産性が1990年代と同じ状況で進むと仮定し、G R Pを算出した。この結果、2030年のG R Pは横浜、川崎、千葉、さいたま市や周辺の都市を含めた「東京都市圏」が2000年に比べ、10.7%増えて176兆7000億円となり、名古屋、大阪など7つの政令指定都市圏は4～10%増加する。だが県庁所在地を除く人口10万人以上の都市圏では平均6.4%減、10万人以下の都市圏は平均15.1%減となり、全体の87%、234都市圏で域内総生産額が軒並み減少する、としている。

「地域経済研究会」は、こうした長期予測を基にした今後の地域経営のあり方について

- ①地域経済への波及効果の高い産業、競争力のある域外市場産業の重点的な振興
 - ②少子高齢化社会に対応した域内市場産業の育成
 - ③公的サービス、公共インフラの各市町村単位でのフルセット主義からの脱却
 - ④都市機能、構造の集約化、合理化による都市構造の再構築
 - ⑤複数市町村による広域的な取り組みによる効率化
- 一が必要としている。

政府に対しても地域活性化ビジョンのモデルケースの提示や地方自治体との協働による少子高齢化対応型の地域産業の振興を求めている。



北海道は30億円、北陸は40億円増

新年度の新幹線事業費を配分、国交省

国土交通省は昨年12月22日、平成18年度の整備新幹線のルート別事業費を決め、配分した。

北海道、東北、北陸、九州新幹線の総事業費は前年度に比べ70億円増の2265億円。事業費のルート別配分額は北海道（新青森～新函館）が前年度比30億円増の60億円、東北（八戸～新青森）が499億円。北陸は年度比40億円増の856億円となっている。

九州・鹿児島ルート（新八代～博多）は前年度と同額の840億円で、九州・長崎ルート（武雄温泉～諫早）は10億円。

北陸新幹線も延伸へ

鉄道運輸機構が南越～敦賀間を認可申請

整備新幹線の建設を担当する鉄道運輸機構は昨年12月12日、国土交通省に対して北陸新幹線の南越駅（福井県越前市）～敦賀駅（敦賀市）間30.2キロの工事実施計画をつくり、認可申請した。フル規格により最高速度は時速260キロの新幹線となる。この区間には新北陸トンネルなどがつくられ、全体の8割がトンネル区間となる。工事費は1220億円。

平成16年の政府与党の申し合わせによると、北陸新幹線は長野～金沢間と福井駅の建設が了承されているが、次の見直しでは金沢以西の延伸が取り上げられる。今回の南越～敦賀間の工事認可申請は、北陸新幹線の基本計画である東京～大阪間のルート設定や建設に向けて大きなステップとなる。しかし、金沢～福井の建設事業費だけで約5000億円が必要といわれるため、その財源の調達など課題が多い。

空港事業も充実さる

羽田空港の再拡張事業に1623億円

国土交通省は、昨年12月の新年度予算の財務省原案の内示を受けて航空局予算を発表した。それによると羽田空港の再拡張事業（4本目の滑走路）として前年度より大幅増加の1623億円計上し、新滑走路や誘導路の工事、エプロン、新管制塔の整備を進める。新滑走路は主に国際線の離着陸に使用される。地方空港の整備継続では百里、静岡、神戸、美保、徳島、新石垣、与那国など7空港の滑走路工事をを行うが、そのため429億円を計上した。

外国人入国者が745万人で過去最多

法務省入国管理局が1月6日にまとめたところによると日本に入国した外国人は約745万人と前年より約69万人、10.3%増えた。愛知万博の開催や、中国の団体客のビザ免除、韓国、台湾の観光客のビザ免除の恒久化の効果が出た。また、出国者は約1740万人で前年に比べ57万人3.4%増えた。これは5年ぶりに高い水準である。

(震が関) 続き

地方空港新時代の幕開け

神戸、隠岐など5空港、観光・交流に弾み

新年は、2月16日の神戸空港の開港を皮切りに新北九州、奥尻（北海道）、隠岐（島根県）、種子島（鹿児島県）の5つの地方空港が新規開港し、観光立国に向けた地方空港新時代の幕開けとなる。2500メートルの滑走路を備えた神戸空港は、日本では初めての神戸市営空港となり、JAL、ANAなどが就航し神戸から札幌、東京、那覇などの主要都市と結ばれ、神戸都市圏からの空の旅が便利になる。神戸市では初年度は319万人、次年度は403万人の利用を期待しており、神戸空港利用者の市内宿泊割り引きや盛大な開港記念行事を計画している。

新北九州空港（国の第2種空港）は、国内や東アジア諸国との交流拡大を目指す北九州市が建設に力を入れた空港で、2500メートルの滑走路が設けられた近代的な空港。3月16日には盛大な記念行事を行い、開港する。北九州市の末吉市長は「北九州市は門司港駅、赤レンガ街など歴史的な遺産が多く、また先端的な環境産業都市でもあり内外の観光客の関心も高い。年間2000万人の誘致を実現したい」と意欲的だ。

また奥尻空港は現在の滑走路800メートルを1500メートルに延長して3月25日に、隠岐空港は1500メートル滑走路を2000メートルとして7月6日に、種子島空港は1500メートル滑走路を2000メートルに延伸して3月16日に開港する。

観光振興の起爆剤になるか

空港拡張で燃える「隠岐の島町」

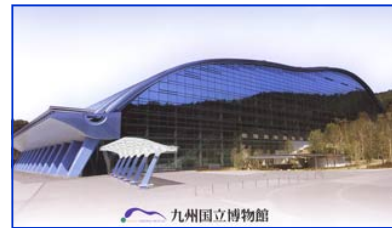
今年7月大阪・伊丹空港から隠岐の島へ、日航ジェット機がやってくる。滑走路も1,500メートルから2,000メートルに延長された。「隠岐」にはジェット機乗り入れにより、夏の観光シーズンを一気に活性化しようとの願いと思惑がある。あまり知られていない「隠岐」の観光資源をこれからどう訴えていくのか。いままで積極的な試みが成されて来なかっただけに、これを機会に「隠岐」はもっと自らの魅力をPRすることを考えようとしている。空港のある隠岐諸島最大の島、「島後」の4町村は16年10月に合併して1島1町となり、隠岐の島町という新しい町に変わった。新しい自治体こそが、斬新な施策を打ち出すことができる。

後醍醐天皇に纏わる歴史的遺産、日本相撲協会から認知された「古典相撲」、牛角力、絶景の国賀海岸、新鮮な近海魚など、埋もれていた観光資源にもっと光を当て、広く全国的に売り出すべきである。はたしてジェット機乗り入れは、隠岐観光振興の起爆剤となるか。 (近藤)

「九州国立博物館」見学記

JN会員 近藤 節夫

昨年10月菅原道真ゆかりの地・大宰府にオープンした「九州国立博物館」を見学した。交通の中心である博多、西鉄天神駅からわずか30分足らずという地の利の良さと、低廉な入館料（大人420円、高・大学生130円、中学生以下・70歳以上無料、特別展示の場合は別途料金）、観光業界主催の割引プラン等も寄与して、開館以来盛況のようである。当初の来館者予想は、半年間17万人に対してオープン1ヶ月で早くも26万人を超えた。



建物本体は近代的なドーム構造になっていて、徒歩で訪れる見学者には10分ほどで西鉄大宰府駅から歩行者天国の商店街アーケード、天満宮

参道を通って辿り着くアプローチが洒落ていて楽しい。入口から博物館本体へのアクセスは山中をぶち抜き、天井が七色に変化する「虹のトンネル」をエスカレーターで昇る仕組み。山中をくり貫いたトンネル構造は、静岡県熱海市郊外の「MOA美術館」のアイディア拝借と誤解されるほど酷似している。

100年以上の歴史を誇る他の国立博物館（東京、奈良、京都）が美術系であるのに対して、地理的にアジアに近く、過去の歴史的交流から歴史系に拘ったと言われているが、一説には貴重な美術品はすでに前記博物館に占有され、入手が難しかったとも揶揄されている。

これから独自の路線を貫いて行くために、近隣の観光施設と一体化した観光開発、広域宣伝、新しい固有の目玉商品開発等が求められるが、その点で走査線4000本による立体的なフィルム画像「海の正倉院・沖の島」映写は、新鮮な印象を与える企画であり、もっと世間にPRしてもよいと思う。

「国立博物館」は、独立行政法人となり新しい道を歩みだした。これから国民の文化に対する要望と期待にどう応えていくのか。その意味で新「九州国

1800万人と最高へ—海外渡航者

JTBによると、2006年の日本人海外渡航者は過去最高の1800万人に上る見通し。トリノ五輪、ドイツでのサッカーワールドカップなどの大型イベントが続くことに加え、団塊の世代が定年を迎えるなど熟年層の動きが期待される、という。

海外渡航者は、2000年に1782万人に達したが、その後の多発テロ、SARS、不況の影響などで微減の状況が続いていた。（関係記事が前ページに）

観・光・人・国・記

岐阜駅前シンボルタワー 「学生落語選手権」を売り込む 細江茂光・岐阜市長



1971年、京大法卒、三井物産入社。17年間の米国勤務、本店サービス事業開発部長等を経て2002年2月退職。直後の市長選出馬、初当選し現在に至る。

JR岐阜駅前がすっかり生まれ変わる。細江市長が手がけた再開発事業で、その目玉は2007年夏に完成する『岐阜シティ・タワー43』。岐阜市が誇りとする1300年前から続く長良川の鵜飼、織田信長の居城だった金華山・岐阜城に続く、21世紀のシンボルタワーとなる。

43階建て地上160メートルを超える、このビルからは長良川はじめ市内が一望できる。なによりも注目されるのは15階以上は分譲マンション、6～14階が高齢者向け賃貸マンションという“人が住む街”を創出することである。平均3000万円という243室の分譲は、即日完売。幸先よいスタートとなった。

全国的に県庁所在地の地方都市は住民の高齢化や郊外への大型店の出店で、中央繁華街が虫食い現象で寂れている。岐阜市も例外ではない。あの「柳ヶ瀬ブルース」で知られ賑わったネオン街も、寂しくなっている。

2002年、三井物産を退職し初の民間出身の市長になった細江さんは考えた。「岐阜の発展は、中心部への人の回帰と、交流人口を増やすことにある」。そして2003年、政令指定都市以外では初の『都市再生緊急整備地域』の指定を受け、駅前と柳ヶ瀬地区の再開発に着手した。

観光とは、その土地の“光”を観てもらうこと。その“光”として、ハード面では、駅前の都市公園化、柳ヶ瀬の復権を目指す。さらに岐阜公園を『歴史公園』として、斎藤道三、信長と続いた英傑のメモリアルパークに変えて行こうという構想を持つ。

ソフト面では信長が実施した『楽市楽座』の現代版を考えていきたい、としている。一方『お笑い感動のまちづくり』も、あわせて進めていく。市内三輪に落語の祖といわれる安楽庵策伝（あんらくあん・さくでん）ゆかりの浄音寺が残る。策伝は説教の名手で、おもしろおかしくオチをつけて仏の道を説く、その集大成とされる「醒睡笑」（せいすいしょう）が、落語の源流とされる。そこで細江市長は、市の支援事業として2003年に「市民お笑い道場」をスタートさせた。さらに桂三枝師匠らを招いて始めた「全日本学生落語選手権一策伝大賞」も2005年で2回目、「落語の甲子園」に育て上げていく構え。

“人を元気に！街も元気に！”を合言葉に、1500回を超える市民との直接対話を通じ岐阜市再発展を目指す細江市長は、まもなく2期目に挑戦する。

「功名が辻」の“妻”を目指して 『十八楼』の若女将がんばる

若奥様にして若女将の伊藤知子さん、150年の歴史をもつ旅館『十八楼』（じゅうはちろう）の直系である。織田信長の居城・岐阜城がある金華山を見上げ清流・長良川に面した、この旅館の名は松尾芭蕉の草庵に由来しており、敷地内には芭蕉の句碑がある。



岐阜と聞いて、すぐ頭に浮かぶのは信長と鵜飼。その鵜飼舟の船着場が、『十八楼』からは専用通路で結ばれている。鵜飼シーズンは、5月11日から10月15日までだが、今年は愛知万博から流れた観光客を含め、「117室がほとんどマンパイ状態でした」と知子さん。この状況は、偶然の産物ではない。知子さんの父親で『十八楼』8代目当主の善男氏は、細江茂光岐阜市長と同級生でもある。そのカオの広さ、大恋愛の末に3年前、婿に入ったご主人の豊邦さんの営業力も、おおいに寄与しているはず。

老舗旅館としての売りは、館内に散りばめられた書、絵、置物など、伝統の重みを感じさせる逸品、そして芭蕉が愛した風景であり、アユを中心とする料理。それらを総勢300人というスタッフが、知子さんらに率いられ、あたたかく迎えるホスピタリティーで包む。

（鵜飼のない冬場は）保存されたアユに加え、河フグと呼ぶナマズ料理、さらに信長が導入したといわれる薬草を生かした薬膳料理が供される。そして、豊臣秀吉が好んで湯治に出向いた有馬温泉と似た成分の温泉と、雪見酒も魅力的だ。

この一帯の地名は「湊町」。かつて、木材はじめ美濃和紙など舟を使つての物資集散地であり、辺りには100年を超える家屋が立ち並び歴史的な雰囲気を持つ「長良川温泉」である。もともと、船頭、商人ら男衆が集う街で、経営者として女性のウエイトは高くなかったそうだが、最近「女性の時代」。

若女将の知子さんも、「長良川温泉女将会」の会長職に就いた。「これからは、泊食分離の比重が高まる。女将さんたちと、女性客誘致の知恵を出し合っています」と知子さん。ちょうどNHKの大河ドラマ「功名が辻」がスタートした。その舞台も、岐阜である。山内一豊の妻を目標にする知子若女将の活躍に期待しよう。

（市長インタビューとともに白澤・加納）



友好関係改善目指し

留学生にインタビューした

JN協会立教支部長 田久保 万理夫

ここ最近中国や韓国との関係があまり良くありません。そこで、日中関係や日本のことについて留学生の本音を探るべくインタビューを実施することにしました。次回も中国留学生を予定しています。

第一回 (2005・12.7、於立教大学)

厳 守誠さん

(中国・上海出身、立教大学観光学部2年)

厳さんの出身地である上海は暴動も多いけど？

上海の人は大衆に流されやすいのだと思う。みんながみんな日中関係のことについてよく考えているわけじゃなくて、周りが騒いでいるから自分もそれに便乗する、といった感じが多いのではないかな。

厳さんは中国政府の立場で日中関係を考えていますか？

日本に来てから、日中どちらの言い分が正しいのかわからなくなった。ずっと中国に居ると中国政府側の言い分しか知らないから暴動も起こるんじゃないかと思う。

日本の歴史の教科書(高校日本史)では、日中戦争のことはこんな風に書かれています・・・(教科書を見せる)。2ページくらいしか書かれていませんね。

噂には聞いていたけど、実際こんなに少ないとは驚いたなあ。中国では、もっとページ数を割いています。教科書は中立の立場で書くのは当たり前だけど、もっと事実を細かく書いて欲しい。

南京に実際行くと、写真や当時の新聞記事など、いろいろな資料がたくさん展示してあります。日本人も行ってみるといい。どうして中国人が日本人を憎むのかよくわかるし、実際日本人で直接行った人もそう言っていた。

でも、僕自身は日本を恨んでいない。祖父母は逃げるために戦争中は引越しばかりで大変だったと聞くけど、父や母も日本に対して悪い印象はない。昔は昔、今は今と僕は考えている。戦争が起これば人は必ず死ぬものだと思う。そのときの強弱で決まってしまう。日中戦争の時、中国の方が強かったら、反対に日本でたくさん犠牲が出ていただろう。だから、悪いのは国じゃなくて戦争自体だ。

日本人についてはどう思いますか。

優しいし、親切な人が多くて好きです。留学生の中では「日本人は二面性があるので、信じないほうがいい」という人もいますが、僕はそんな風に思わなかった。日本人は愛想がいい。留学生がそれを見てもっと仲良くしようとするので、相手が構えたりするので、「日本人は二面性がある」と思われるのだろう。日本人の付き合いは広く浅くで、中国人はもっと深い付き合い方をしていると思う。

日本人は外国人を避けていると思いますか？

思います。でも日本は島国だから外国人を拒む傾向があるってみんな言っているの、そうかな、と思う程度。自分自身は日本人がそこまで避けているとは思っていない。

～インタビューを終えて～

厳さんは日本に対して非常によいイメージを持っていました。また日中関係についても悪いのは戦争自体であってどちらの国が悪いかを争うのは間違っているとの見解を示してくれました。しかし、彼がいうように留学生の中にも様々な考えを持った人がいると思います。厳さんがインタビューの感想として「もっと留学生に会ってほしい」と言ったように今後インタビューを継続し、日中間の理解を深めていきたいと思います。

第二回外国人ツアーレポート

立教大学観光学部2年 西山英恵

2005年11月19日実施。今回のツアーのテーマは「日本の伝統文化」。参加してくれた外国人留学生の方は5人で、イタリア・インド・モンゴル・韓国・中国から、と様々。私たちも5人。

まず私たちは東銀座で歌舞伎を鑑賞。「息子」という一幕を鑑賞しました。歌舞伎そのものと更に、上演中の掛け声にも私たちが知らなかった一面を見つけて十分に楽しみました。外国人向けのイヤホン貸出もあって留学生の方は内容を日本人の私たちよりも理解している部分もありました。

日本伝統芸能である歌舞伎を味わって、次は浅草へ。浅草は週末ということもあって大賑わい！浅草寺まで歩きながら、あげ饅頭を食べたり侍のカツラをかぶってみたり、と雰囲気を楽しみました。そして浅草寺でお参り。おみくじに一喜一憂しつつ、ここでは日本と他の国の宗教観の違いの話になり、私たちは日本についての知識がまだまだ足りないことを実感…。浅草寺を出てせんべい焼を見学しに行った後、そのまま隅田川へ。



そして待ちに待ったランチタイム！隅田川のほとりでピクニックをしながら天丼を食べました。とても陽気が良くて留学生の方々との話も弾みました。続いて上野の下町民族資料館へ

行き、大はしゃぎで昔の遊びやら生活やらを体験！夢中で遊んで時間を忘れてしまった程でした。

そしてツアーの最後に行ったのは谷中銀座。迷子になった私たちが着いたのは少し遅い時間でしたが、そこは賑わいの時間だったので結果オーライ！？とにかく安いコロッケを食べ歩いたり、商店街のおじさんとお話をしたりと、楽しい時間はすぐに過ぎていきました。

2006年がスタートしました。遅ればせながら、謹賀新年！

JN観光情報協会創立5周年を迎えて

—旅と感動・感謝—

理事長 松尾道彦（海事財団会長）

「九州観光推進機構の設立」

JN協会九州支部長

長尾亜夫（西日本鉄道社長）

本年は当協会創立5周年の大事な節目の年となります。

日本経済も回復基調にあり、また2月にはイタリアのトリノでの冬季オリンピック、6月にはドイツでのFIFAワールドカップ等国際的なスポーツ祭典が行われる明るい活気のある年にふさわしい門出となりますことを祈念しています。

本年はまた、「日中観光交流年」として、日中両国政府観光当局間で合意され、日本側としては、ビザ問題もほぼ解決でき、経済成長の目ざましい中国からの観光客の誘致を目指す「ビジット・ジャパン・キャンペーン」の重要な柱として位置付けされています。

観光・文化交流は双方向として発展することが望ましく、中国側としても、北京、上海、広州等の大都市地域のみならず、内陸部のシルクロード周辺地域、海南島等リゾート地域等幅広い地域の魅力ある環境整備やサービス向上にも着々と尽力されています。真の観光交流のためには、心底からの両国民の相互理解が大切です。相手の「嫌がることは言わない」との人の道としての基本中の基本を日常行動の中で確立することが最大の要諦です。

「旅」の楽しさは、生活文化の差異はあっても、新しい見聞を広め、新しい人々に会って、縁を深め、人の情に癒されるところに感動を覚え、置かれた今に心から感謝できることではないでしょうか。何も大それた理屈は何も要りません。人と人との縁をいかに大切に深めて行くことができるかを「交流」の原点として、JN協会として、少しでもお役に立つことができればと考えています。

九州においては、平成17年4月、九州七県と経済界が一体となり、JR九州の田中会長をトップとする「九州観光推進機構」が発足し、具体的な取り組みを始めております。

これまでは、「九州はひとつ」という掛け声はあっても、九州各県ごとに様々な組織・機関があり、それぞれの予算で、それぞれに活動していたのが実情であったと思います。たとえば、各県ごとに作成した観光地図などは、自県の境の外は空白で、道はどこにつながっているのか、あるいは県境を挟んだ隣の市町村にはどんな観光施設があるのかが分からない、というように利用者の立場を十分に反映していない取り組みもあつたように感じておりました。

今回、機構の設立により、各県の枠を越え、九州が一つになり、観光を大きな視野で捉え、取り組む体制ができたと思っております。

日本全体よりも早く人口減少時代に入った九州にとって、交流人口をいかに増やしていくかが非常に重要です。九州域外からお客様にきていただく、そして九州域内でも交流を増やしていく、まさに観光への取り組みが大事になってきます。さらに、観光の振興によって雇用の拡大が図られることも期待されます。

私自身も一層、九州内を動き回り、良さを体感し、九州の内外へ情報を発信するお手伝いができればと考えております。



情報紙充実めざし、皆様のご投稿を期待！

歴史ある旧町名を復活

更なる観光振興目指し—金沢市

北陸支部長・水野卓哉（前北陸鉄道会長）



いよいよわが国の人口が減少に転じたようで、既に地方にその傾向は現れていたのであります。そんな中で、交流人口の増加に向けた観光振興は焦眉の急であり、各地で独自の工夫を凝らした取り組みが行われています。例えば、金沢ではいくつかの歴史ある旧町名を復活し、「金沢検定」の実施は、“地政学”を多くの地域の人々に学んでもらう試みを行いました。

このように観光地や観光資産の魅力を再認識し、“知る”から“識る”へのレベルアップは地域に誇りを持ち、その輝きを、遠来のお客様に観ていただき、心からおもてなしをするという観光本来の姿に立ち返る動きが広まりつつあります。

北陸は多くの観光資源に恵まれ、その中で各地各業のブランド化に向けた努力が傾注されています。そしてこれらを広域的に、統一された魅力として、効率よく利用者にお知らせする仕組みづくりが急務となり進められています。

私たちの“ご挨拶”です。今年もご支援を、お願いします！

特定非営利活動法人「江戸城再建を目指す会」 設立趣意書

近年、世界各地は観光立国と魅力ある国づくりに向けて熾烈な競争を繰り広げているが、その中において東京は国際都市として未だ確固たる地歩を築いていないと言え難い。その要因の一つは、日本の首都でありながら日本らしさを体現する、傑出した歴史的、文化的遺産が存在しない点にある。

かつての都・江戸は世界で最も魅力的なまちの一つと謳われていた。もしここに、1657年の明暦の大火により失われた天守閣を始め、江戸城の遺構が再建されれば、それは世界に伍して発展する国際観光、交流都市東京の形成に寄与するのみならず、21世紀における日本再生の新しいシンボルにもなり得る、と確信する。

このような観点から、私たちは再建を具体化するための各種の調査、研究を進めると共に、広く世論を喚起するための様々な活動を展開すべく、特定非営利活動法人「江戸城再建を目指す会」を立ち上げる。

平成17年10月1日

「江戸城再建を目指す会」

代表 小竹 直隆

夢実現に向け、新たな旅立ち

「江戸城再建を目指す会」がNPO法人申請へ

JAPAN NOW観光情報協会の友好提携団体として昨年12月に発足した任意団体「江戸城再建を目指す会」が、いよいよ正式にNPO法人の認証申請をすることになった。

「江戸城再建を目指す会」は昨年来、会員募集と組織基盤の強化に力を入れてきたが、昨年9月現在団体個人の会員総数が160名を超えたことから、昨年10月1日会員総会を開催し、NPO法人の認証申請を全会一致で決議した。

今春NPO法人の認証が得られれば「目指す会」は江戸城再建に向けて、いよいよ本格的な活動を展開する予定。NPO法人設立総会において、新たな役員として会長は本JN観光情報協会顧問の丹羽晟氏、副会長並びに理事長には、夫々JN協会副理事長の橋元雅司氏、小竹直隆氏が就任することになった。

「今年の干支・戌に思う」

副理事長 橋元雅司（元国鉄副総裁）

いつも正月前後になると、干支（エト）の話が話題になる。平成18年の干支は「丙戌（ヒノエ・イヌ）、俗にいえば「犬年」である。

故安岡正篤先生の説かれるところを受け売りすると、こうなる。

まず「丙（へイ）」という文字は10干の第3番目で、一昨年「甲」の年（草木の芽が殻を破って出る）から、昨年「乙」の年（出た芽が寒さや抵抗にあって伸びきらずに曲折する）を経て、陽気が一段とはっきり発展することを示す。従って、丙の年は何事も明らかで光り輝くのだが、陽気が盛んになったからといって有頂天になってはならない。「哲人は幾（き）＝兆（兆）を知る」という名言のとおり、変化の機に注意すべきであるという。

一方、「戌（ジュツ）」は「茂」と同義の語で、「繁茂する」とか「盛ん」、「豊か」、「多い」などの意味があり発展的な要素を示す。しかし、茂ること、枝葉の繁も成長が過ぎると、かえって木が傷んだり、日当たり悪くなって風通しが不十分になる。抹消的煩瑣、煩わしさが過剰となる状態に至る。したがって「戌削」という言葉があるように、思い切った枝葉末節や、煩瑣冗漫なことを刈り取って、簡易化、簡素化しなければならない。いわば、無駄なことを省いて合理化していく改革の断行が肝要だという。

以上要するに、「丙戌」の今年は陽気は明らかに伸びていくが、ただ反転する気配もあるので変化の機に注意し、順調な繁盛の中にあっても煩雑なものを断固として切り取り簡素化していく合理的、戌削的改革が求められる年ということになる。

碩学の大先生のおっしゃることだから、なるほどと思われるが、結論はしごく当たり前のこと。いずれにしても、皆様方の新年のますますのご活躍と大いなる清福を心からお祈り申し上げます。



神戸マリンエア・神戸空港開港

神戸支部長・岩田弘三（神戸商工会議所副会頭）

2月16日、神戸マリンエア、「神戸空港」がいよいよ開港します。昨年春、神戸支部が設立されてから初めての新春を迎えましたが、開港当初から、7都市、27便の就航が確定し、神戸に陸海空のアクセス拠点が整い、震災から11年目を迎えた神戸が正に新たな旅立ちを始めるに相応しい年を迎えることができました。

この神戸空港は世界で最もユニバーサルな空港を目指して、空港ターミナルビル内にはユビキタスの最先端技術を駆使した案内表示や全ての障害者が共有できる施設のあり方を模索するなど諸工夫を凝らしており、都心部から、ポートライナーで最短16分余というアクセスの良さが最大の売り物です。わが国の14大都市で最も首都東京からの時間距離の遠かった神戸と東京との間のアクセスの不便さも一気に解消します。また、就航先の札幌、仙台、新潟、熊本、鹿児島、那覇などとの観光交流の活発化が大いに期待されています。

2006年がスタートしました。遅ればせながら、謹賀新年！

THE SUN ALSO RISES

顧問 丹羽晟 (前理事長)



昨年の勤労感謝の日に、私は家内と2人で神奈川県逗子市の海岸に行った。石原慎太郎さんの文学記念碑「太陽の季節」の除幕式に出席するためである。

「太陽の季節」が発表されたのは昭和30年の「文学界」7月号で、すでに新人賞を受賞していた。石原さんが一橋大学法学部4年の時のことである。翌31年にこの作品が芥川賞を受賞した。

それから半世紀たち、有志が集って「太陽の季節」発祥の地である逗子海岸に記念碑を建立することとなったのである。石原さんから贈呈された著書「弟」を読んで初めて知ったのだが、石原さんは小学校4年生から逗子の住人になっている。

私は石原さんと同い年だが、実は我が生家の別荘が逗子にあり、小学生の頃まで毎年夏は逗子で過ごしていた。「弟」を読みながら当時逗子の海岸で会っていたかも知れないと、思ったものである。逗子の葉山寄りを流れる田越川にかかる最後の橋が渚橋で、その渚橋の横の砂浜に記念碑が立っていた。碑は全体が黄金色に光り輝いて見え、碑の前面に「太陽の季節こゝに始まる」と書いてある。式には石原さんも出席され、元気一杯の挨拶をされた。内容はあまりよく覚えていないが、現在の日本の若者達もこの逗子の海岸を原点として世の中を動かしていけと檄をとばしておられた様な気がする。

そしてその中での言葉が表題のTHE SUN ALSO RISESである。日は又昇る。これはノーベル文学賞作家ERNEST HEMINGWAYの作品の題名である。

偶 感

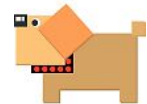
副理事長 橋爪孝之(ジャルックス相談役)



心筋梗塞は、何の前触れもなく、起こった。昨年9月中旬のある真夜中、締め付けられるような胸苦しさに目が覚めた。唾を呑み込んでも、ニトログリセリンの舌下錠を口に含んでも直らない。どうもいつもと違う。「齢80ともなれば、いつ倒れても不思議じゃない」と人にも言い、自分でも覚悟していたつもりが、いざとなると、狼狽えた。間髪をいれず、家人が119番を呼ぶ。ストレッチャーで、運び出されながら、胸を押さえて、「人間というものは、こうして死んで行くのだな」と妙に実感した。

しかし、近年の心臓疾患の治療技術の進歩は目覚ましい。外科手術に依らず、カテーテルで薬剤ステントを挿入する。冠動脈形成術は、何の不安もなく、私の心臓血流を、正常に戻してくれた。医師にも恵まれ、看護婦たちも優しく、私は、生まれて初めての、入院生活を楽しんだ。まとまった時間を、誰憚ることなく、読書に過ごせる嬉しさ。

このところJN観光情報協会の活動とも、無縁の日が続いている。心苦しい気持ちに責められるが、身体が、言うことをきかない。入院生活で衰えた、足腰の回復には、齢のせいもあり、まだ、かなりの時間がかかるだろう。いつまでも、迷惑をかけているわけにもいかない。そろそろ、協会の役職から、身を引く時期にきているようだ。



芭蕉の旅に学ぶ

副理事長 岡村 進

ここ数年、私は年末に「みちのく一人旅」を、松島を拠点に楽しむようになった。そして俳聖・松尾芭蕉の「月日は百代の過客にして、行かふ年もまた旅人也」の心境を自分なりに解釈して楽しんでいる。最近、46歳の晩年にして「奥の細道」の旅に出かけた芭蕉が、残雪の時期に何故に唐突に標高1980メートルもある険しい困難な「月山登山の旅」に挑んだのか不思議に思うようになった。

冬枯れの松島湾のやわらかな陽の光の中で、キラキラと光る波間でゆった〜りと揺られて生まれた緑の松林につつまれた小島の群れに見とれていると、自分がまるで極楽浄土に入り込んでしまったような錯覚に陥ってしまう。この浮世絵のような絶景に孤高の芭蕉は囚らずも極楽浄土を見てしまったのではないのか、気の挫けそうになっている弱い自分を見てしまったのではないのか。それ故に俳句人生の内なる迷いの最終整理の為に、死を覚悟して「月山登山」に挑んだのではないのかと、私なりの推理を結論づけて楽しんでいる。後に芭蕉はこの月山決死行で「不易流行論」を究めたと言われ、「奥の細道」が後世の人材の尽力により刊行されたのは、死後7年が経っていた。

本協会は今年で5年目を迎えるという。発足当時はいろいろな人々にお世話になっている。そのご恩に報いる為にも、多数の人材がおられるのだから、よりよいアイデンティティを確立して、覚悟して協会の発展に尽くさねばと考えている。

私たちの“ご挨拶”です。今年もご支援を、お願いします！

中部（東海、北陸、信州）広域観光

副理事長 須田寛（JR東海相談役）

交通の発達で人々の行動範囲が広がるなか観光でも各地が連携して面的なひろがりをはかることが必要だ。とくに東海、北陸、信州は同じ中部地方を形成しているが、これまで観光面での連携が充分でなかった。



しかし、各地域はそれぞれ特色のある風物を持ち独特の伝統をもって発展してきたので、これらをまとめてひとつの広域観光圏をつくる必要が痛感される。

昨年10月に「中部広域観光協議会」が経済界、自治体、観光団体の提唱で発足（会長・豊田中経連会長）した。本年からいよいよ具体的施策の実施に入る。万国博に接して中部広域観光の動機がつけられたので、これを発展させながら地域の特色を活かした新しい切り口の観光（産業観光、街道観光、都市観光等）を中心に中部九県（富山、石川、福井、愛知、岐阜、三重、静岡、滋賀、長野）が力をあわせて新しい観光活動を展開したい。今年を「中部観光元年」にふさわしい年にしたいと考えている。

北陸の地に「射水市」誕生！

富山県射水市長 分家静男（JN理事）

明けましておめでとうございます。わが射水市（いみずし）は、昨年の11月、私が市長をしていました新湊市と周辺の4町村が合併して生まれたばかりの新しい市です。



場所は、富山県の真ん中に位置し、JRや高速道路など非常に交通の便に恵まれています。旧新湊市は港まちの風情あふれ、かに、白えび、ほたるいか、ぶりなど豊富な魚種に恵まれ海の幸のおいしい街として全国にPRしてきました。しかし、新しい市には、山があり、川があり、のどかな田園風景も広がっています。また竹の子、りんご、梨など自慢のできる野の幸もたくさんあります。このような地の利やすばらしい素材を活かし全国に誇れる「射水ブランド」を築き上げていきたいと考えています。さらに、歴史、文化を感じる数々の神社仏閣や絵本館や陶房など遊んで学べる体験施設も多くあります。

本年は、トップセールスとして、この魅力あふれる射水市の名を大いに情報発信をしていきます。皆さん、是非、射水市を訪れていただき、北陸を満喫してってください。市民あげてお迎えします。

「ヘルスツーリズム」など目的型旅行の推進へ

豊かな自然、温泉、食を楽しめる北海道の新たな目玉を！

北海道支部長 坂本眞一（JR北海道会長）

新年明けましておめでとうございます。

昨年11月、JN協会北海道支部が誕生し、支部長を拝命致しました坂本でございます。北海道観光の振興に微力ではございますが、力を発揮して参りたいと存じますので、今後ともよろしくお願い致します。



さて、個人旅行への変化が進むとともに、旅行内容も単なる物見遊山でなく目的意識を持ったものになって来ていることから、フラワーツーリズム、産業観光、エコツーリズム、ヘルスツーリズム等の新しい観光施策の検討が進んでおります。中でも健康づくりなどを意識した、新しい観光を考える「ヘルスツーリズム」が、北海道を舞台に関係者により進展を見せております。

昨春に実施した上士幌町での「スギ花粉疎開ツアー」では、スギ花粉の影響のない上士幌町に滞在し、花粉症を治すという首都圏からのツアーで、地域の人々と交流しながらストレスを解消するという、森と温泉のリラックス効果、そして、北海道ならではの食材による食生活の改善を目指すというもので、首都圏で大いに注目を集めました。また、ヘルスツーリズムのほか、団塊の世代の大量定年をにらんだ長期滞在型（ロングステイ）の観光や、地方への移住ビジネスについても、北海道が全国に向けて発信しており、「豊かな自然、温泉、食」とともに北海道観光の新たなニーズとして推進を図ってゆきたいと考えております。本年もよろしくご指導ご鞭撻お願い申し上げます。

JN協会の全国展開は順調に進み、2006年には中国、四国、東北地方でも支部を設立する準備を進めています。その幸先を占うかのように、この新年号では、主だった地方支部の支部長が新年のメッセージを寄せて下さいました。理事長以下役員、支部長各位の意欲をお読み取り下さい。

層雲峡と荒井建設

荒井建設㈱

代表取締役社長執行役員 荒井保明

「荒井建設株式会社」の歴史は、明治27年に富山県から来道した荒井初一が母体となる「荒井組」を創業したことに始まる。

当社が110年以上もの歴史を刻めた最大の理由は創業者初一の教えである「地域への奉仕の精神」を貫いてきたからだと自負している。初一は地域振興・地位貢献のための努力を惜しまなかった。初一の地域貢献で特筆すべきは層雲峡開発である。

ここで層雲峡のことを少し紹介したい。層雲峡は雄大な山並続く大雪山連峰の麓（ふもと）にある。当社本社のある旭川市から約70km弱、車で1時間ちょっとの距離である。大雪山国立公園の中の温泉郷であり、石狩川に沿って24kmも続く峡谷など、ダイナミックな自然（柱状節理）が広がる。春には残雪の峡谷に新しい生命が芽生え、夏には新緑が峡谷に映え、秋には千変万化の彩りに染まり、冬には一面銀世界の中に湯けむり上がる光景となる。

層雲温泉は1900（明治33）年に、塩谷という父子が塩谷温泉を発見したことに端を発している。1922（大正11）年11月に押し寄せた暴風雨により、塩谷温泉は多大な被害を受けた。当時、初一が塩谷温泉近くで石北線鉄道工事を請け負っていたため、従業員の仮宿泊場として権利譲渡された。初一は1924（大正13）年に旅館を新築し、塩谷温泉層雲閣として本格的に温泉事業を始めた。また、上川～層雲峡間の10数キロの道路工事を私費で成し遂げ、層雲峡開

発に布石を打ったのであった。その後、層雲峡は日本百景に入選し、初一は「大雪山調査会」設立活動や国立公園指定にも尽力した。現在、層雲峡は年間250万人の観光客が訪れ100万人が宿泊する北海道でも屈指の観光地となった。大小18軒の温泉宿があって、その中で一番の老舗が当社の「層雲閣グランドホテル」である。

層雲峡「氷瀑まつり」へ、どうぞ！

これからの季節、層雲峡を訪れるのであれば「層雲峡氷瀑まつり」が見逃せない。今年で31回目を迎える「氷瀑まつり」は層雲峡の閑散期対策として始まった。層雲峡温泉内の石狩川河川敷を利用し、会場の広さは1万平方メートルある。

会場内には氷柱・氷のトンネル・アイスドーム等が作成され夜はライトアップされとても神秘的な風景となる。

開催期間は平成18年1月28日から3月26日までである。1月から2月にかけて層雲峡は氷点下30度の厳冬期を迎える。「氷瀑まつり」をご覧になるのであれば是非この厳冬期をお勧めしたい。



荒井建設株式会社

<http://www.araiakensetsu.co.jp/>

層雲閣グランドホテル

<http://www.sounkaku.co.jp/>

JN協会の経理は健全、節約が実る

JN協会は昨年12月の企画委員会（理事会に準ずる）で、随時、協会の経理内容を公開することを決めた。その必要性を感じていた矢先、12月5日の日経新聞『領空侵犯』欄で伊藤忠商事の丹羽宇一郎会長が「透明性と情報開示」をNPO法人の大きな課題の一つと指摘、共感し早速実施することにした。以下は、その第一号である。

JN協会の平成17年度中間仮決算（4～12月）：単位千円

収入の部		支出の部	
講演会収入	1, 673	事業費・講演会費	1, 673
個人会員会費	801	JN紙発行費	1, 241
団体会員会費	4, 950	研究会費	232
計	7, 424	管理費・交通費	1, 091
		賃借料	1, 209
		通信費	594
		IT費	221
		その他	572
(差し引き残高)	591)	計	6, 833

注) ①前年度繰越金（2005年3月末）は、157.4千円と、黒字を計上している。

②管理費に「人件費」の項目がないのは、理事長以下常駐の事務局員も全員無給ボランティアだから。JN発行費は、取材交通費インク代、用紙費であり、編集費はゼロ（無給ボランティア）。2005年度（4～12月）は6回発行しており、1号当たり20万円強。交通費は、ジバング倶楽部など最低の料金適用。

③交通費は、常勤事務局員（4人）の自宅からの交通費プラス主として都内での取材などの交通費。

以上のように、無給ボランティアと手づくりでの情報紙発行など、きわめて安上がりの体制となっている。

スポーツと観光

楽しく滑る基本 スキー (2)

アルペン・スキーの基本は、スキーを「ハ」の字に開き、左右の足に交互に体重を移すことによってターンする「ボーゲン」だ。足の開き方によってスピードをコントロールする。この滑り方をマスターするだけで中斜面ぐらいまでは滑れるようになる。次はボーゲンのターンの最後に足をそろえる「シュテム・ターン」。この滑り方に熟達してくると、スキーを揃えたままターンする「パラレル」に進む。

昔は、左右のスキーをぴったり揃えて滑るのが理想だったが、「カービング・スキー」の出現した7、8年前からずいぶんフォームが変化してきた。カービングでは、足を肩幅ぐらいに開いて滑る。また以前は「谷側の足に重心を置き」と口を酸っぱくして言われたのが、最近は「両足に均等に体重を乗せろ」と言われるようになった。



カービング・スキーは、板の先端と末端が従来のスキーよりも幅広で、足を乗せる真ん中あたりがくびれたようになっていて、このためサイドがゆるやかにカーブしており、このおかげでターンが非常に楽になった。年配のスキーヤーの中には新しい奇妙な形のスキーに抵抗感のある人も多いようだが、是非試してみたい。最初の2、3日は不自然な

感じがするかもしれないが、慣れると従来のスキーよりも軽快に滑れることに気づくだろう。

変わったといえばスキーウェアもずいぶん変わった。以前は、蛍光色を使ったり金色に光る素材を使ったりで、なぜ日本人はスキーウェアだけはこう派手なんでしょうと不思議で仕方がなかった。デザインもアメフトのように肩に厚くパッドが入っていて逆三角形のシルエットだった。



しかしスノーボー족が増えてから、彼らのファッションの影響で、スキーウェアにもカーキやネイビーのような地味なものが増え、ジャケットのデザインはゆったりとしたものが主流になった。防水加工や転んだときに雪が入らない工夫はしてあるが、そのまま渋谷を歩けるようなデザインになったのだ。改めて昔のド派手なスキーウェア文化というのはなんだったのかと思われる。(竹内カナ)

航空券の被害者は1300人、1億2千万円
 旅行会社「トラベル遊」(本社・東京・品川)が手配した航空券が受け取られなくなった問題で、社団法人「日本旅行業協会」(新町光示会長)に届けでた旅行者は約1300人、被害総額は1億2千万円に上ることが、1月10日までに分かった。旅行業法に基づき協会がチケットの弁済金を払うが限度は被害者全員で450万円。社長には連絡が取れない。

C O L U M N

‘隼戦闘機’名パイロットの思い出

旧臘旧陸軍航空隊「加藤隼戦闘隊」伝説の名パイロット安田義人さんが亡くなられたと奥様から丁寧なお知らせをいただいた。享年90歳だった。大東亜戦争開戦とともに、安田さんらの「飛行第64戦隊」は中国から南方へ展開した。時まさに戦雲急を告げる昭和17年5月22日、突如敵機の襲来に安田さんは戦隊長、加藤建夫中佐機ら僚機4機とともにビルマ(現ミャンマー)・メイクテーラ基地から邀撃発進し、ベンガル湾上空で英ブレンハイム機と遭遇、激戦の末負傷して離脱帰還した。しかし、戦隊長機は武運拙く被弾、洋上で反転墜落し、加藤戦隊長は名誉の戦死を遂げた。7度の感状を授かった加藤建夫中佐が2階級特進(少将)し、軍神となって当時の国民的英雄となった瞬間である。

戦後戦友とともにビルマから復員して、昭和49年ビルマ慰霊の旅で一緒した時、かつて隼戦闘隊の航空基地のひとつであったビルマ中部・ヘホ空港への着陸前に、プロペラ機から懐かしそうに窓外の山野を食い入るように眺めていた安田さんに「懐かしいでしょうね」と声をかけたら、「敵機を追うことに夢中で、当時は景色なんか全然目に入らなかったですよ」と微笑まれた。到着してから何気なく「でもお日様と風が懐かしい」とつぶやかれたことが忘れられない。昨夏靖国神社でお会いした時、小泉首相の騒がしい靖国参拝問題には触れず、淡々と「みんな親しい仲間は亡くなりました。開戦時のパイロットで残っているのは私ひとりになりました」と感慨深そうに話されたことが強く印象に残っている。

温厚で優しく安田さんは手柄話をひけらかすでもなく、戦時中に一世を風靡した、戦隊歌♪加藤隼戦闘隊♪を作詞された田中林平さんをひとり施設に見舞っていた。戦後60年が経過して、いままた安田さんも亡くなられ、終戦の年国民学校に入学した私にとっても戦後は遠くなってしまった。(近藤)

「日本で見つけた 世界おいしい物語」

ギリシャ料理 スピローズ

原宿駅から明治通りとの交差点を過ぎ、交番の手前を左折。通称キャットストリートをいくと、白地にブルーのSpyro'sという看板がある。店の名は、1896年近代オリンピック第一回アテネ大会のマラソン優勝者スピロス・ルイスの名前なのか、ギリシャ最大の洋酒メーカー創始者であるスピロス・メタウサからなのか、よくわからないが、ギリシャ人にとって馴染みのある名前のようなのだ。

アペタイザーとしては、デイップセットがおすすめ。タラモサラダ、ザジキ（にんにくときゅうりの利いたヨーグルト）ペースト状のナスを生野菜につけて食べる。「アサリのウズ蒸し」もよい。ウズとはリキュール的一种。ただし、この料理はオリーブオイルとにんにくの香りが前面にでているので、ウズの香りがよくわからない。肉料理の定番はスブラキというチキンやビーフの串焼き料理である。

ギリシャ料理で一番有名なのは、なすとミートソースのラザニアのような「ムサカ」料理の価格はだいたい1000円前後、ワイン込み4000円ほどで堪能。

ギリシャ料理はボリューム満点で、オイリー、チーズ味、ヨーグルト風味という特徴があるので、さっぱり感はない。姉妹店が六本木にある。

住所は渋谷区神宮前4-26-28ジャンクヤード3F
Tel. 03-5786-4446。営業時間は月から木と日曜が11:00-24:00 金、土は11:00-01:00である。六本木店は、ランチタイム、ディナータイムがわかれているので、ぶらり行くのは表参道店がおすすめ。

(大島慎子)

日本唯一のホテル客室常備文化情報誌

JAPAN NOW

1985年に創刊され、ホテルオークラ、帝国ホテルなど全国のシティホテル110館約50,000室の客室に常備されている日米対訳の文化情報誌です。

2005年度版は編集・デザインを大幅に刷新。表紙は気鋭の合羽刷(版画)師、西岡文彦氏による作品としました。英文も基本的に全文対訳とし、学校教材としても使えます。

特集では、世界遺産に登録された「熊野三山」に焦点を当て、歴史・風土・文化、そして現在の姿を豊富写真を中心に紹介しています。

さらに、木村尚三郎氏による巻頭メッセージ、金子務、鎌田東両氏による特集エッセイは、これまで以上に読みごたえのある記事となっています。

1部2,000円(送料別)で購入できます。



お問い合わせは(株)ジャパン・ナウへ。

電話03-3533-7051 FAX03-3533-7054

地域おこしと「道の駅」

今年は記録的な大雪で日本列島が冷蔵庫の中にスッポリ埋まっているような日々が続いた。昨年はこの季節には春の足音が、南からすこ〜しずつ聞こえてきて、暦どおり立春を迎えられたような気がした。そして、毎年千葉の白浜で行われている「菜の花マラソン」参加のご案内も送られてきて、心身ともに春への準備が着々と進められた。

ところが今年は、気候もさることながら、菜の花マラソンのご案内も送られてこないでインターネットで確認してみたところ、「町村合併により21年の幕を閉じることになりました。皆様のご参加ありがとうございました」というメッセージがあり、思わぬ幕切れにがっかりした次第である。千葉の白浜町は、安房7町村(富浦、富山、三芳、千倉、丸山、和田、白浜)が合併して3月20日に南房総市となる。

マラソンのイベントは、地域興しにもなっており、全国数えきれないほどの開催がされている。地元では準備から集客までかなりの時間と労力が費やされているだろうなと思っていたが、折角21年の歴史ある「白浜・菜の花マラソン」なので、地域おこしのひとつとして継続できないものかと思うものである。地元の情報の発信地で車の休憩場所として機能している「道の駅」は着々と増えているようで、



「菜の花マラソン」の開催地でもあった白浜野島崎灯台に、この春3月12日(予定)に道の駅「白浜野島崎」がオープンする。

国道410号線沿いで、駐車場は大型2台・普通22台・身障者2台。農産物特産コーナーがあり、開催が楽しみである。

問い合わせ：0470-38-3111 (白浜町役場)

理事 堤るり

[会員募集]

都市の再生、観光振興、環境保全の市民活動に賛同する会員を募集しています。

個人会員(1口5千円)、団体会員(1口5万円)

東京都渋谷区代々木1-58-13小田急代々木ビル3階
JAPANNOW観光情報協会(電話03-5304-9500)
へご連絡ください。

会員の投稿を歓迎します

情報紙の充実を目指して!!

観光情報紙2006年3月号への個人、団体会員の投稿を歓迎します(400~500文字程度)。皆様のご意見を、どしどしお寄せ下さい。詳細は事務局まで。

発行は2006年3月15日。締め切りは3月7日。

NPOから提案します

ジャパンノウ観光情報協会への期待 その24 観光基本法の指針性

JN協会理事 寺前秀一

わが国において観光に関する法制度が発展してこなかった理由として、観光基本法の指針性の欠如に原因があるという仮説的主張がある。観光基本法の指針性の欠如は容易に立証されるが、観光基本法の指針性の欠如は、規範性のある観光概念が整理されないまま同法が規定されたことに起因し、逆に観光関係法制度が発展しなかったことにより、規範性のある観光概念も発展しなかったということにつながる。このことは観光基本法の存在如何に関わらず、そもそも規範性のある観光関係法制度は発展しないものであったのではないかとすることを想起させることとなり、最終的には規範性のある観光概念そのものの樹立が困難ではないかという結論を導くこととなってしまふ。

わが国観光関係法制度の規範性を分析すれば、『「日常」と「非日常」の意識の接近現象』が、税・助成制度をはじめ、観光資源制度、宿泊制度、交通制度に現れてきていることが立証され、規範性のある観光概念の見直しが必要ではないかという分析結果を得る。また、観光関係法制度の未発達は、『「日常」と「非日常」の意識の接近現象』とあいまって、旅行業法に代表されるように個別観光関係法の規範性の低下という形で深刻な現象として現れている。特に主催旅行(企画旅行)

規範性について、実利用者と旅行業者が包括料金に基づき旅行業契約を締結すると実運送・宿泊法の経済規制が適用されないという実務慣行の、法的根拠の説明が困難であり旅行業法及び実旅客運送法の関係の規範性に疑問が呈されている。

1967年に制定された公害対策基本法が廃止されて新たに環境基本法が1993年制定された際、新たな理念の制定にとどまらずに18の関係法令が改正されていることに鑑み、観光基本法の見直しにあっても、単に理念の見直しにとどまらず、観光関係法令が再編成されて規範性が確保されることが望まれる次第であり、そのことが観光制度論のみならず観光学全体の発展にもつながるものと考えられる。

太陽光発電は、救世主？

2005年12月、社会経済生産性本部の企画に乗って、白澤事務局長と「つくば太陽光発電」と東京電力の「常陸那珂石炭専焼発電所」「福島第一原子力発電所」を見学した。



この太陽光発電は、1000KWの能力で日本最大級。日本全体は2003年で86万KWの能力を、2010年には482万KWに増やす計画というが、それでも日本全体の発電量の0.5%。いったん設置すると発電費用は安いそうだが、エースには？ (加納)

際の運行を始める前で、戦車そのものの色の車体にはまったく興味を感じませんでした。でも何年か経って実際に乗ってみると、本当に楽しいのです。

ボストンにはアメリカ独立戦争にまつわる史跡がいくつもあり、徒歩でも見て回る事ができますが、このツアーの特徴の一つは、ボストン市と隣のケンブリッジ市との間を流れるチャールズ川にドボンと入って、川から街を眺められるところにあります。この景色がまた、抜群のすばらしさです。

夏の間、客席はオープンエアになっていますから写真を撮ったりすることも簡単ですし、水の中に入れば爽快感も味わえます。ガイドをかねたドライバーは名所案内をしながら、時折乗客に「ダック、ダック」と叫ばせて走りますから、目立つことこの上なしです。ボストンに行かれる機会がありましたら是非お試し下さい。

出発はボストンのプルーデンシャル・センター前とケンブリッジのボストン科学博物館前。所要時間は1時間30分。運行期間は3月27日から11月26日まで。料金は大人1人20ドルです。(いずれも2006年の予定と料金です)

JN会員 井上 嘉世子

あめりか観光通信 その3 ~ボストン~

ボストン・ダック・ツアー

昨年12月に、6年ぶりにマサチューセッツ州ボストンを訪れました。アメリカの歴史が始まった街は見所も多く、歩いて回れる大きさは観光都市としても最適です。勿論ロブスターやクラム・チャウダーといった日本人好みの食事も楽しめます。

今回はそのボストン観光のユニークなツアーをご紹介します。

ボストン・ダック・ツアーは第二次世界大戦に使用された水陸両用車を使っています。外観をカラフルに塗り、そこにダックのマスコットをあしらったかわい的車で、市内の観光地を回ります。このアイデアはボストンで生まれたものではありませんが、1994年にこの地でスタートし、今では人気のツアーになりました。私が初めて見たのは実



コピーライト Boston Duck Tour

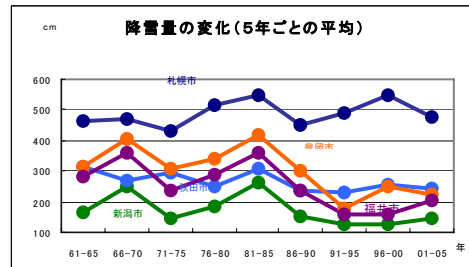
「22世紀の雪国」

2004年は、晩秋から暖かな日が続き、多くの所で平年より初雪が2週間から1ヶ月以上遅れ、山形市、富山市、金沢市などでは観測史上、「最も遅い初雪」を記録、中越地震に見舞われた新潟地方でも過去10年で最も遅い初雪となりました。

2005年は一変し、12月から日本列島に猛烈な寒波が襲来し、20～58年ぶりの大雪に見舞われていますが、少し長い目でみまると雪国の方の実感として「最近では雪が少なくなった！」と感じている人が多いのではないでしょうか。実際、日本海側の降雪量の変化を調べてみると、北海道を除く地域で20年ほど前から降雪量が少なくなっています。

2005年10月に気象庁が発表した「異常気象レポート」によれば、100年後、22世紀が始まる頃の気温は、現在よりも世界で2.5度、日本でも2～3度高くなると予測しています。雪国にとって、雪は「大敵」でもあり「恵

み」でもあります。気温が上がれば「雪」は「雨」になりますので雪国の降雪量は減り、生活面では暮らしやすくなると予想されます。一方で雪を利用した産業や観光、レジャーなどの地域の変貌、自然のダムと呼ばれる山間部の雪が減ることによる夏場の水不足、あるいは冬の大雨による融雪洪水や土砂災害などの問題が新たに生まれる可能性があります。（日本気象協会 林 英美）



降雪量と積雪量
降雪量とは、1時間毎の積雪の増加量を合計して何センチと発表されます。これに対し、積雪量は観測時点で地面に積もっている雪の深さです。左のグラフはひと冬の降雪量を合計した値で、積雪量よりもかなり多い値になります。

会員名簿 (敬称略) (個人会員名簿は別刷ご参照)

- 名誉顧問 : 松山善三 (映画監督)
 理事長 : 松尾道彦 (日本海事財団会長、前日本鉄道建設公団総裁)
 顧問 : 丹羽晟 (前理事長、日本空港ビルディング相談役)
 副理事長 : 白澤照雄 (JN協会事務局長)、岡村進 (小田急電鉄顧問)、橋元雅司 (元国鉄副総裁)、橋爪孝之 (㈱JALUX相談役)、大島慎子 (ドイツワイン基金駐日代表)、小竹直隆 (元JTB専務)、須田寛 (東海旅客鉄道相談役)
 支部長 : 片山文彦 (新宿支部)、水野卓哉 (北陸支部)、田久保万里夫 (立教支部)、長尾亜夫 (九州支部)、須田寛 (中部支部)、岩田弘三 (神戸支部)、坂本眞一 (北海道支部)

【団体会員】(2006年01月20日現在)

(株)朝日ネット、(株)アドバン、荒井建設株、アンデス電気株、安藤建設株、池田煖房工業株、(株)伊勢丹、岩田建設株、(株)エスシー・マシーナリ、(株)HKIアクセス、(株)大林組、隠岐の島町 (島根県)、(株)奥村組、小田急建設株、小田急電鉄株、(株)小田急トラベル、鹿島建設株、鹿島道路(株)東京支店、大阪国際空港ターミナル株、関西電力株、九城企業株、(株)九電工東京支店、九州電力株、九州旅客鉄道株、(株)熊谷組、(株)グリーンキャブ、群馬県、京浜急行電鉄株、(株)耕人舎、国光施設工業株、佐川サポートサービス株、三協アルミニウム工業株、(株)三普旅行社、清水建設株、(株)ジャルセールス、(株)JAL-DFS、(株)JALUX、(株)JTB、(株)ジェイアール貨物・リサーチセンター、消音技研株、新菱冷熱工業株、常磐興産ピーシー株、住友電設株、(有)西洋館センター、静和堂竹内印刷株、(株)銭高組、全日本空輸株、総合パーキング建設株、セントラルリーシングシステム株、第一交通産業株、(株)大気社、大興物産株東京支店、大成建設株、大成サービス株、大成設備株、大成ユーレック株、大鉄工業株北陸支店、大日産業株、高砂熱学工業株、(株)竹中工務店、(株)丹青社、中部電力株、ティーシートレーディング株東京支店、電研工業株、東海旅客鉄道株、東急建設株、東京急行電鉄株、東京国立博物館、(財)東京観光財団、東京電力株、東光電気工事株、東芝エレベータ株、東北電力株、トーヨーカネツソリューションズ株、戸田建設株、名古屋鉄道株、西日本鉄道株、西日本旅客鉄道株、(株)西原衛生工業所、西松建設株、日墨ホテル投資株、日本オーチス・エレベータ株、(株)日本海コンサルタント、日本空港ビルディング株、(株)日本航空インターナショナル、(財)日本交通文化協会、(社)日本添乗サービス協会、(株)日本プラント建設、ネスレジャパングループ、箱根町 (神奈川県)、箱根建設株、東日本旅客鉄道株、(株)日立ビルシステム、(株)ビッグウイング、福岡空港ビルディング株、富士機材株、藤長電気株、富士通株、プラネットワークス株、(株)フィールドサービス、北海道旅客鉄道株、北海道電力株、北陸電力株、北海道空港株、(株)ホテル小田急、(株)ホテルメトロポリタン、前田建設工業株、ホテルマリックス、マイナミホールディングス株、三井住友建設株東京建築支店、三菱電機株、(株)ミルックス、(学)森谷学園、(株)山武ビルシステムカンパニー、有楽土地株、(株)USEN、横浜貨物総合株、横浜ビル建材株、菱重輸送機エンジニアリング株、りんかい日産建設株

特定非営利活動法人(NPO)

人と都市・観光の地球時代を、市民が支えます!

JAPAN NOW

観光情報協会

〒151-0053 東京都渋谷区代々木1-58-13

小田急代々木ビル3F

電話 03(5304)9500

FAX 03(5304)5632

E-mail info@japannow.org

Home page http://www.japannow.org

発行人: 白澤照雄 (JN協会事務局長)

編集長: 加納 隆 (JN協会理事)

発行部数: 3000部 主な配布先: 会員、中央官庁、地方自治体、民間企業、マスコミなど

編集後記

2006年がスタートしました。理事長はじめ役員の皆さんに寄稿をお願いしましたところ、どさっと原稿が集まりました。で、今年も16ページとなりました。ほとんど一人で対処しましたので、荒っぽい編集になりました。ご批判の目をもってお読み下さい。

12ページにJN協会の仮決算を載せました。初めてのことですが、皆様から寄せられた貴重な会費をどのように使っているのか、簡単にまとめました。ともかく、安上がりの協会であることを認めていただけるのではないかと、思います。

事務局の平均年齢は“還暦”と“古稀”の間。高齢化社会の一つのモデルケースかな、と自負しています。今年も頑張ります。(加納)